第 6 章

エッセイで綴る日米学生会議

これからの日米学生会議に向けて
菅家万里江 ……………………………150

国際交流 ― スピーチ表現
加納康宗 ……………………………152

日米間の議論の違いから得た教訓
土岐吉史 ……………………………153

日米学生会議の社会的意義―
第59回日米学生会議の挑戦
松田浩道 ……………………………154

思い出になるJASC
安田 雅治 ……………………………155

これからの日米学生会議に向けて

第59回日米学生会議日本側副実行委員長
菅家万里江

＜はじめに＞

第30回日米学生会議参加者を母に持つ私にとって、この会議は憧れの存在であり、完全無欠で、永続するものと信じていた。しかし、この会議の財政状況が芳しくなく、開催意義が疑問視されている事実に直面し、衝撃を受けた。日本で最初の国際学生会議であり、個人的にも非常に影響を受けた思い出深い会議であるので、会議が存続することを心から望んでいる。それには会議の意義を我々がもう一度考え直し、旧体制からの脱却を図らなくてはならない。本稿では、これからの日米学生会議に向け、委員としての経験から提言を行う。

＜日米学生会議の意義＞

「世界で最も重要な二国間関係」。故マンスフィールド元駐日大使は、日米関係をそう表現した。太平洋戦争から半世紀あまりで、日米関係がこれほど成熟したことは驚くべき事実であるし、「日米間の平和」を理念に掲げる日米学生会議にとって、この言葉は目的が達成されたという点で非常に意義がある。しかし、皮肉なことに、それは会議の存亡を脅かしているのも事実である。すなわち、「日米関係が良好な今、果たしてこの会議を行う意義はあるのだろうか」という声が会議内外を問わず挙がってきているのである。

それでは、日米学生会議の意義とは何か。歴代の報告書に綴られているように、「教育機関」「相互理解」といった言葉のみに集約されてしまうのか。それとも、設立時のように、外交的な意味も持つのだろうか。以下、故マンスフィールド元駐日大使の言葉を軸とし、悲観論的・楽観論的立場から、日米学生会議の意義を問い直してみたい。

まず、悲観論的な視点からはじめたい。そもそも、米国は日米関係を「最も重要な二国間関係」と本当に捉えているのだろうか。否、この点に関してはまだ疑問の余地があるといえる。私は現在米国に留学しているが、CNNやABCなどの報道機関でも、大学の国際関係などの授業でも日本が登場するのは稀で、米国における日本のプレゼンスは限定的であると感じる。一方、日本は米国に政治的・軍事的・経済的に大きく依存しており、米国に関するニュースを見ない日はない。このようなアシンメトリーな関係の中、我々は「最も重要な二国間関係」というレトリックに甘えていいのだろうか。先鋭的な草の根交流団体として、米国の学生に、日本や日本の学生の考えを知り、対日意識を高めてもらうことは、依然重要ではないのだろうか。この点において、利害関係に囚われず、自由な議論が出来、多くを吸収する力を持つ学生の時期に、交流し、相互に影響しあう日米学生会議は、非政府的外交使節としての意義を現在も失ってはいないといえる。

もちろん、日米関係を「最も重要な二国間関係」としても、会議の価値は十分にあると断言できる。秋田フォーラムのパネルディスカッションで言及した通り、将来の日米学生会議は、危機感からではなく、二国間関係が世界平和に対して貢献できる更なる可能性を追求していくべきである。政治・経済・文化など多岐にわたる分野に関して、互いの資源を共有し、協力しあうことで、一国では困難な影響力、そして多国的な協力では成しにくい、柔軟性や迅速性を持ち合わせた政策の実現が可能になる。

当会議ではこの考えの下、「太平洋から世界へ～グローバルパートナーシップの探究と次代の創造～」というテーマを打ち立てた。「日米関係の成熟による太平洋の平和を、混沌とする世界の平和につなげる」という第59回会議の理念は、会議の原点に回帰するのと同時に、70年以上の時を経て、会議が一歩前進したことを意味する。テロ、環境問題、貧困、移民、様々な問題が山積するグローバル社会の中で、世界第1位と2位の経済大国が協力して貢献出来る可能性を探ることが、今後の日米学生会議の意義であると私は考える。

＜日米学生会議の成長の必要性＞

今日、日米学生会議の社会的意義が低下したと指摘されるのには、他にも要因がある。それは、会議

が前年度の参加者による運営のため、内容が社会的な貢献より、次年度の会議の参加者のためのものとなり、内輪的になるのである。そのため、会議の伝統や意義を理解していても、賛助団体としては社会的成果がより短期的で明白である他団体を支援することになり、必然的に日米学生会議に対する援助額が減少する。これは会議の存続において非常に深刻な問題である。

改善策の一つとして、「他の団体と共催して、大きな社会的な意義のある企画を行う」ということがあげられる。第59回会議では、英語名で“Advocating Japan-America Participation in Global Change”という理念を掲げ、その中核を成す“Advocate”という言葉の下、アジア財団との共催のアジアフォーラムと、秋田日米協会との共催の秋田フォーラムを開催した。どちらも箱（資金・場所の提供）は共催団体が、中身（発表者・発表内容）は日米学生会議が担当するという役割分担を行い、日米の学生の問題意識を広く社会に発信するフォーラムであった。特に、私が直接手がけた秋田フォーラムを例にとって、共催によって得られるメリットについて言及したい。

秋田フォーラムは、地元高校生及び大学生150人を含む総勢300人の来場者数を記録し、複数のメディアから取材も受けた。レセプションも含めてその予算総額は200万円規模にのぼり、第59回日米学生会議の中でも大きな企画となった。このように、社会的な大規模な企画を達成することが出来たのも、ひとえに秋田日米協会の方々のご協力があったからであった。フォーラムの企画、及び講演者の招聘、来賓者、政府高官の方々への挨拶の依頼などは実行委員が行ったが、それ以外の、高校・大学への広報、メディア（テレビ・ラジオ・新聞）への呼びかけ、財務、当日の進行、会場の設営、レセプションの内容決定・進行など、ほとんどの仕事は、秋田日米協会の方々が行ってくださった。特に、財務・広報の二点については、地元密着型で行わなければ成功せず、その点で、秋田日米協会の方々のご協力は不可欠であった。また、協会のほうで既に何度か大きなフォーラムを開催した経験があったため、そのノウハウ、ドゥハウを全面的に提供していただくことが出来た。このように資金的・能力的な協力体制を全面的に得られたのも、ひとえに「共催」の形を採用したからであろう。

では、なぜ、「共催」なのか。それは、「後援」等と比べて、関与の度合いが大幅に強まるからある。「後援」は、名義的な性格で、全面的な協力を得ることは難しい。しかし、「共催」であれば、その団体の事業の一部として取り組んで下さり、全面的な協力が得られるのである。学生が運営するという日米学生会議の弱点、すなわち、学生の時間的・能力的限界を補い、より社会的意義のある企画を行う方法、それが他団体との共催で企画を遂行することである。

尚、この項の始まりに、「社会的意義のある企画」と「参加者の満足を図る企画」の二項対立を示したが、このように共催によって大きな企画を行うことは、決して会議の質を低下させるものではない。社会的意義のある企画を通して、会議参加者が、参加者としての自覚を持ち、会議の意義を見出す契機になり、会議に関わる意識も向上する。現に第59回日米学生会議では、これらのフォーラムを通して参加者が会議の可能性を見出し、意識の向上につながったと考える。

海外留学が容易になり、様々な国際交流プログラムが存在する今日において、「日米学生会議」の伝統と名声に甘えているだけでは、この会議はその他の国際交流系の団体の中に埋没してしまうだろう。それを防ぎ、この会議を後世まで存続させるためにも、積極的に外部と提携しあい、社会発信をし、日米学生会議の存在意義を社会にアピールしていくことが必要である。

＜おわりに＞

事務所においてあった過去の報告書の山を読み進めるうちに、私たちは毎回同じ過ちを繰り返し、同じ苦悩を抱いていることを痛感した。「会議の限界」「開催意義の相対的低下」など、このエッセイで取り上げた項目は、過去10年の報告書を紐解けば其処此処に見つけることが出来る。日米学生会議の最大の欠点としては、第55回日米学生会議日本側実行委員長の乗竹氏もそのエッセイで言及していたことだ

が、委員が毎年交代してしまう、ということにある。それは逆に会議の形骸化を防ぎ、多くの学生に会議運営の機会を与えるという点で非常に意義のあることであるが、積年の反省が次代の会議運営に生かされないという短所を持つ。しかし、我々（特に次の代の実行委員）は、過去から学ばなければならない、何が日米学生会議に求められており、どのような変革の必要性があるのかを。そしてそれを自分たちの会議の中で達成し、次の会議へ引き継いでいかなければならない。そうしなければ、日米学生会議はいつかその歴史に幕を下ろすことになってしまうだろう。私がこの文章を本報告書に記載することを決意したのも、そのような使命感と危機感があったからである。

無論、この文章が後代の実行委員の目に触れるかどうかは定かではない。だが、この拙作文が多少なりとも後世の実行委員及び日米学生会議の糧になれば本望である。

国際交流 ――― スピーチ表現

第59回日米学生会議参加者　**加納康宗**

The masters of this reception and wonderful audience thank you very much.

My name is Yasumune Kano, a part of Japanese delegation. I am honored to make a speech on my experience at the final reception of the 59th Japan-America Student Conference.

The most precious thing I got during JASC is friendships and deepest understanding with everyone I met, especially the members of the nationalism round table. I had precious time with all ECs and delegates. I wouldn't have met all of you if I were not in JASC but now every one of you is ever-lasting friend. It is impossible to speak everything in a few minutes so let me talk about this matter at the end of my speech.

In JASC, I learned a special subject "relationships". I was surprised and stressed to realize so many differences. One of the most important things in JASC is to get along with different people because more than 70 students are living together for a whole month. Some of us may have struggled with a few friends. As it is JASC, however, we cannot ignore troubles. There is no way to escape.

There may be more stress when we talk about politics or sentimental issues. My round table was nationalism and we often had intense discussions. To others, I may have just been the image of "Japanese conservative". In fact, I used to be burdensome for liberal teachers in high school days, especially in Japanese history class. To be honest again, I was feeling guilty 10 days ago in Akita for causing conflicts. In the following site Hiroshima, I found myself sarcastically saying "fortunately" when there was nothing intense. I felt shameful right after that. JASC is where students exchange their opinions without hesitation or political responsibility. If I were a politician or a government employee called "bureaucrat", I would. But we are students and don't have to worry about such things. We just have to be honest and avoid misunderstanding. I became confident about it in Kyoto, where I finally felt what is called mutual understanding. Today's final presentation was a part of the very agreement we achieved after the intense discussions called "peace building". I know that many people worried about our intensity but we finally made it. Then, I stopped feeling my round table was tough and started to feel at home there. At the same time, I gave up seeking for my JASC-love. It was the first time ever to feel at home where I once felt like getting away from. Besides, it is rewarding to explain culture and history of our country in a foreign language. I vividly remember how hard it was to explain Japanese original concepts like "every dead is a Buddha" or "imperial family state" in English. However, when I finished them with help of perfect bilingual friends, it

was moving. So, Hiro, Shinji and Rui, thank you very much. I was not fluent in English but I felt like I have something to contribute to the round table. At the same time, I promised that as long as I'm on the table, I will never let any Ame-dele to say "misterious" about Japan. Of course, it is also a good chance to clarify what we take for granted.

Yesterday, during the preparation for today's final forum, I suddenly got absent-minded behind Nancy, great organizer of today's presentation. I was not sleepy or apathetic but was coming up with the following for the last paragraph of this speech.

I am not confident whether we can really contribute to the peace of the world. I cannot say I have understood everything of the United States of America. However, I have no doubt that we 72 JASCers have established deepest understanding with one another. We have JASC identity and culture in common. We are global citizens working for pacifism and development as micro media. Even though we may have different nationalism, we have this JASCism in common by sharing the same experience and memory of this summer. Our great alumni Mr. Kiichi Miyazawa and Eleanor Hadley, who passed away this year, have accomplished the supreme goal of JASC and this is the mutual understanding that society and the history are expecting us to practice again.

Lastly, it took me a whole month to say this in front of all JASCers. It is my genuine pleasure to meet every one of you. I'm proud of all of you. My JASC-love is JASC.

日米間の議論の違いから得た教訓

第59回日米学生会議参加者　**土岐吉史**

約１ヵ月の日米学生会議を終え、大阪に戻りました。平静な生活に帰りJASCを思い出すと、白熱した分科会の議論が頭に思い浮かびます。そこに日米間の議論の違いから得た教訓があります。

ファイナルフォーラムに向け準備を進める過程で、議論が白熱する分科会。私が所属していたメディア分科会では、毎日激しい議論が進められていました。英語が母国語ではない私にとってこの議論のスピードについていくのは本当に大変でした。そもそも、日本人の議論の「カタチ」とアメリカ人の議論の「カタチ」に違いがあることを強くを感じました。

日本式の議論の進め方は熟考型です。ファイナルフォーラムで少しでもやってみたいと思うことがあっても、すぐに発言するのではなく、具体的なプロセスや問題点を考えたうえで、「これで大丈夫だ」と思えば、１つのアイディアとして提案します。発言をするまでに時間がかかるのは、自分が納得するプロセスが成立するまで熟考するからです。このように、日本ではそれぞれが熟考したアイディアを提案し、その中で１番良いと思われるモノを選出し議論の答えとします。

一方、アメリカ式の議論の進め方はブレインストーミング型です。ほんの少しでも、アイディアがあれば、たとえそれが不完全だとしても熟考せずにどんどん発言します。頭に浮かんだモノをすべて言葉にし、アイディアとして提案します。この断片的に浮かんだ不完全なアイディアをそれぞれが限りなく出し合い、一つひとつの破片を重ね合わせることで、大きな１つのアイディアを組立てる。この作業により全員の意見の集大成を議論の答えとするのです。開始当初この様な議論の違いにとても戸惑い、議論について行く事ができませんでした。しかし、東京観光や各地で開かれるフォーラムや夜の飲み会を通じて、分科会メンバーとプライベートな部分を分かち合うことで、それぞれの考え方、性格、発言の方法などが理解できるようになりました。個人の性格

や考え方を理解できたことは、アメリカ式でめまぐるしく進む議論にとても役立ちました。「あ、彼はこう考えているな。」「はいはい、あのことか。」などと、少しずつ考えがわかり、議論についていける様になりました。

しかし、ファイナルフォーラムを完成させるには議論について行くだけでは十分ではありません。アメリカ人学生に日本式の熟考型プロセスを理解してもらい、それと同時にアメリカ式に近い形で日本側もアイディアを提案することが必要だと感じました。

そこで、分科会での対応策をとりました。メディア分科会の日本人リーダーも、この日本とアメリカの議論形式の違いに気付いていたので、アメリカ側に、「議論の進め方が違うので、スピードについて行けない時はスピードダウンをしてほしい。」「議論中、黙っている人がいても、それは何も考えていないのではなく、その人なりに頭の中でプロセスを熟考しているんだよ。」と説明をし、議論の違いに理解を求めました。

次に個人的な対応策として、まず「Yes、No」をはっきり文頭で発言するようにしました。発言者の考えに対して自分の立場をはっきりと文頭で表明することで、どの部分が同じで、どの部分が違うと意思確認がしやすくなるためです。そこで大切なのは、「I don't agree with you」ではなく、「I don't agree with your idea」と言うことです。「I don't agree with you」ではその人自身を否定することになります。「I don't agree with your idea」とその人のアイディアを否定していると意思表示をし、意見の違いを説明することが大切です。日本式、アメリカ式の議論の違いに気付き、互いに歩み寄ること、また個人としてその人自身を否定するのではなく、アイディアを否定することで議論をうまく進めることができます。

秋田フォーラムのゲストスピーカー、茂木健一郎さんがおっしゃっていました。「学生の強みは、その発言に一切責任を持たなくてよいことだ」と。企業に勤めるようになると、社会的立場から発言に注意しなければならなくなるが、学生は人を傷つけることを除いては、自由に物事を発言できる。議論においても頭に浮かんだアイディアがあればまず発言してみる。発言をすると同時にプロセスを熟考し、納得のいく説明をすることができれば大成功です。頭に浮かんだものをうまく瞬時に発言する「瞬発力」の大切さに気付きました。

最後に、日米学生会議の議論を通じ次のことを学びました。議論の違いを認め、お互いが歩み寄ることでよりよい議論を作り上げることや、学生の強みを活かした「瞬発力」を兼ね備えた発言をすることです。また、英語によるアメリカ人学生相手の議論という事で、自分の意見をうまく伝えられず、「もっと発言すればよかった…。もう少し英語ができれば…」と今になって後悔を感じます。しかし、同時に、同じ世代の学生が活発に意見を発言し、果敢に議論を進める姿を見て、「同じ学生であれだけできるから、自分もやればできるんじゃないか。」と強く可能性を感じます。来年の4月から私は企業で働きます。今回感じた「後悔」を繰り返さないため、仲間から学んだ「可能性」を強く信じて自分自身を成長させていきたいです。

日米学生会議の社会的意義―
第59回日米学生会議の挑戦

第59回日米学生会議実行委員　**松田浩道**

日米学生会議の社会的意義とは何か。何のためにこの会議を運営するのか―日米学生会議に参加するもの、特に実行委員に選ばれたものが必ず一度は考える問いであろう。

歴史を辿れば、設立当初は非政府外交使節としての役割、貴重な草の根交流の場としての意義が極めて重要であった。しかし、長い年月を経て日米関係は変化し、学生が運営する企画としての目新しさも薄れる中で、日米学生会議が依って立つべき成立根拠は一見すると弱まりつつある。その中で、特に財務活動などを通じ外部の方々と接し、いかにたくさ

んの団体、企業からこの会議が支援を受けているかを実感した実行委員を中心に、何らかの形で日米学生会議は社会に価値を還元していかなければならないという使命感が生まれることとなる。

昨年の第58回会議では、目に見える形での短期的成果の発信を目標に掲げていた。具体的には政策提言の作成などが提案され、それらによって実際に社会を変えて行くことが目指された。しかし、学生としての力の制約から、このような試みが実際に社会に対してどれだけインパクトを持ちうるかということについてはどうしても限界があった。

今回の第59回会議では、そのような短期的目標を掲げる動きはあまり目立たなかったといえるだろう。各分科会では最終フォーラムで議論の過程と結論を発表することを主な目的とし、活動を行った。

その背景には、目に見えない参加者の成長という日米学生会議の教育的効果に注目し、長期的に社会に価値を還元して行くことに集中することで日米学生会議本来の力を発揮できるのではないかという思いがあった。しかし、社会的な貢献のために積極的に努力することを諦めた訳では決してない。第59回会議の挑戦として、一般公開のフォーラムを各開催地で開くこと、さらに教育効果を狙う対象を日米学生会議参加者にとどめず、社会一般に大きく開くことが試みられた。秋田フォーラムでの学生との交流会、広島での２日間の現地学生とのプログラム、そして京都での交流会と、なるべく多くの地元大学生、高校生と交流する機会を確保し、一般公開のフォーラムでもなるべく多くの観客を集めるよう努力した。従来、日米学生会議に参加した72名だけを対象とする講演会などの企画は充実していても、本会議中に日米学生会議を社会に開く機会が少なかったことと比較して、第59回日米学生会議のこれらの試みは特筆に値するだろう。

多くの日本の学生にとってアメリカの学生との交流の機会は現在においても貴重であるし、現地の学生との交流で学べることは互いに非常に大きい。日米学生会議の持つ力を参加者だけにとどめず、広く一般に開く。それによって日米のパートナーシップの価値を社会に“Advocate”し、広く多くの学生に刺激を与えることで「次代の創造」につなげて行く。第59回日米学生会議のテーマに込めたこのような思いが実現されるか否かは、会議参加者、または各地で企画に関わった一人一人の学生の今後の活躍にかかっている。

思い出になるJASC

第59回日米学生会議実行委員　**安田雅治**

朝起きて、すぐに朝食の準備にとりかかる。すぐに出なければいけないので、ゆっくりもしていられない。荷造りもまだ半端だ。なんとか寮を出る。不安に思ったが、ちゃんと彼女はトラム(路面電車)の駅に来ていてくれた。しかし、３日というのは、短すぎた。出会ったのはおとといのパーティ。自分はもう今日オランダに行かなくてはいけない。次に会えるのはいつになるか、もう会えないかもしれない。

朝食をとろう。町で１番有名で雰囲気のある通りへ行った。そこは１年中オープンカフェと客でにぎわっている。しかし今日は土曜の朝、人はほとんどいない。まずは、名物のホットチョコレートをオーダーしてからゆっくりと過ごした。

話はおかしな方向へと進んでいく。普通ならロマンティックになるところだが、ドイツと日本という現実を感じると、その話はだんだんと空虚に響き、いつしか話から熱気は消えうせ、そこにはむなしさだけが漂っていた。沈黙が始まりそうだ。

その時彼女のほうから口に出してくれた。

「まだまだこの街知らないでしょ、どこかつれてってあげるよ」

何を望んでいたのだろう、なにも望んでいなかったのかもしれない。いまだにわからない。街をまわり、しばらくして駅に着いてしまった。駅の中の名所も案内してくれた。時間まで電車で一緒に待つことにした。

そろそろ出発だと、車内放送を通訳してくれた。目の前にはしあわせそうな母子がいる。

とにかくドアへと動く。それから１分経つ、でも10分あったように思える。発車のベルが鳴った。彼女はホームへと戻る。大声で叫びあった。間もなくドアは閉じる。ゆっくりと滑り出す。彼女もあわせて歩き出し、すぐに全速力で、最後まで手を振って走ってくれた。目の前にいた姿が、すぐに豆粒の様になってしまった。

翻って、第59回日米学生会議。いったいそれはなんだったのか。71の違った答えがあるはずだろう。答えなどでないかもしれないだろう。

JASCに関わって１年半。

JASC 59というものをまだまだ消化できていない。やりきったと言い切っているほかのECがうらやましくおもえることもある。自分の中で８割くらいができなかったこと、やりきれなかったこと。

いま思えば、ECになるきっかけはサンフランシスコのラーメン屋だった。そこでイチローにもあったのだが、もうそのことは人に言われないと思い出せない。

今、バイト先のギャラリーでこの感想を書いている。毎朝、ギャラリーの鍵を空けて、セッティングし、お花の手入れが終れば準備は完了だ。そのあと、開店前の一時にスタッフルームでタバコをふかしていると、トリュフォーの映画の主人公になったみたいな気がしてくる。客はほとんどこないからずっと感想を書いている。頭にのぼってくるのは、さっきのドイツの話ばかり（もう２年前）。そんないい思い出でないのかもしれないのに。しかし、JASCの思い出が無い訳では決してない。むしろあり過ぎて消化しきれない。そもそも、もはや思い出ではなく、日常すら変えてしまった。そして根付いてしまった。

Anyway,
むなしく思うことだけでもなければ、悔やむことだけでも終わらない、キラキラしているものだらけ。でも、ただのいい思い出では終わらない。

それが自分にとってのJASC59ではなかったかと感じている。